

# クマの保全と生物多様性

日本クマネットワーク



地球上には、数千万種の多様な生きものが存在し、食う・食われるなど様々な関係でつながっています。このように数多くの種類の生きものが存在し、互いに関係をもっていること自体、驚くべきことですが、それは 35 億年という気の遠くなるような時間をかけてできあがったものです。

クマも、そのような生きものの一員です。

このように多様な生きものは、その存在自体にすでに価値がありますが、医薬品、芸術のモチーフ等として人間にも様々な恩恵をもたらしてくれています。未来の子どもたちも同じ恩恵に預かれるように、クマを始めとする生きものの多様性を守り、育み、上手に利用していくことが必要です。

しかし、人間の活動により、地球中の生きものは、すさまじいスピードで絶滅しつつあります。クマも絶滅の危機にさらされている生きものの一つです。

# 日本のクマの分布と遺伝的多様性

日本には2種のクマがいます。

北海道に生息するヒグマと本州と四国に生息するツキノワグマです。

同じ種でも地域毎に遺伝的な違いが見られます。



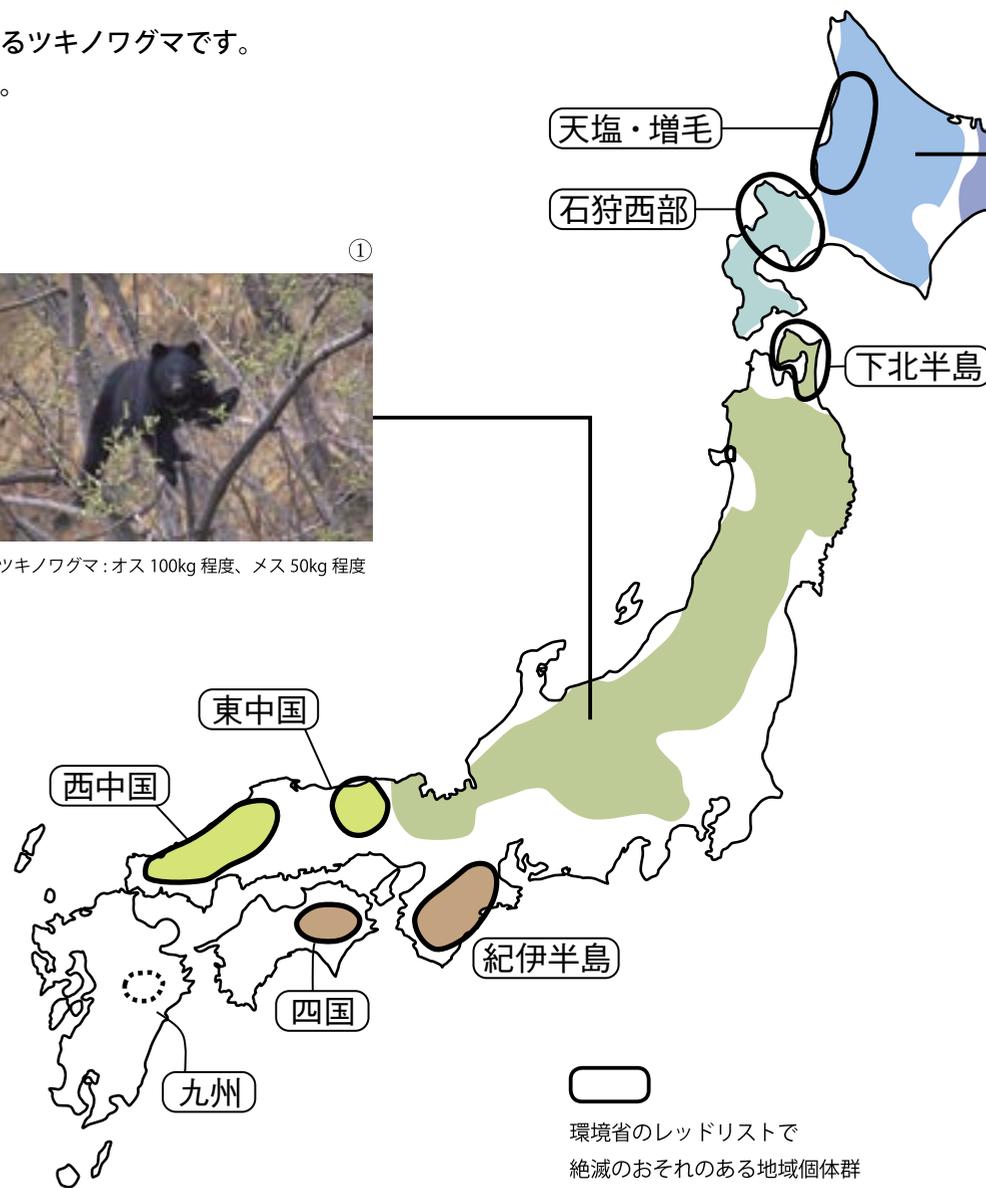
## ツキノワグマ *Ursus thibetanus*

ツキノワグマの分布域は東日本でおおむね連続していますが、下北半島、西日本の九州、紀伊半島、東中国地方、西中国地方、四国の6地域のクマは孤立して生息数が少ないので、環境省のレッドリストに「絶滅のおそれのある地域個体群」として掲載されています。ただし、九州では絶滅した可能性が高いと考えられています。

このツキノワグマは、地域によって個性的な遺伝子を持つことが知られています。一般に、種として多様な遺伝子を持つことは、環境変化への適応能力の高さを示すと考えられています。しかし、西日本の遺伝子の多様性は東日本に比べて低く、この点からも絶滅の危険性が高いことが心配されています。西日本では古くから開発が進み、クマが好む広葉樹林は伐採され、剥げ山になったり針葉樹林に置き換えられたりしてきました。こうした人間活動がクマの生息地を狭め、個体群を孤立させたと考えられます。孤立し生息数の少ない個体群では限られた相手としか交配が出来ないため、遺伝的多様性が減少するのです。



ツキノワグマ: オス 100kg 程度、メス 50kg 程度



天塩・増毛

石狩西部

下北半島

東中国

西中国

四国

九州

紀伊半島



環境省のレッドリストで  
絶滅のおそれのある地域個体群

遺伝学的には、ヒグマ、ツキノワグマとも、大きく分けて3系統いることがわかっている。分布図の色の違いは系統の違いを表している。

ヒグマ: オス 130~200kg、  
メス 80~100kg



②

## ヒグマ *Ursus arctos*

ヒグマは、北海道のほぼ全域に生息しています。そのうち天塩・増毛および石狩西部の個体群は孤立し生息数が少ないため、環境省のレッドリストでは「絶滅のおそれのある地域個体群」に指定されています。

ヒグマの遺伝子は大きく3つ(道北-道央グループ、道東グループ、道南グループ)に分かれます。道北-道央グループはユーラシアや西アラスカのヒグマと近縁、道東グループは西アラスカのヒグマよりも先に北米に渡った東アラスカのヒグマと近縁、道南グループは、なんとチベットヒグマと近縁だということがわかっています。それぞれ、遠い昔の異なる年代に、異なるルートを経て北海道に渡来したと考えられています。遺伝子の多様性は、クマと日本の自然の歴史を語ってくれる証人でもあるのです。

夏

恋の季節。交尾期です。

前年に生まれて約1歳半になった子グマが母グマから離れるのもこの時期です。

春には柔らかかった草や木の葉は硬くなり、食物としては好ましくなくなります。

代わりにサクラやイチゴなどの果実、アリやハチなどの昆虫を

食べたりします。

### ツキノワグマと果実

夏や秋のクマの糞をよく見てみると、サクラやイチゴなどの種子がたくさん入っていることがあります。クマは広い土地を移動しながら様々な果実を食べるので、他の動物たちよりも、たくさんの種類の植物の種子を遠くまで運ぶことができます。クマは果実を食べてその種をまくことで、森の維持に役立っています。

春

冬の長い眠りから覚めたクマたちは、

樹木や草の芽吹き、花や前年の秋に地面に落ちたドングリの実を食べます。シカの多い地域では、

春先に餓死したシカを食べることもあります。

冬眠中に産んだ母グマは子グマが少し大きくなるのを待って、他のクマより遅くに穴から出てきます。

秋

食欲の秋。ミズナラやコナラ、ブナ、クリ、カキ、ヤマブドウなど、さまざまな樹木の果実が実ります。クマは冬眠に備えて、ひたすら食べ、たっぷり脂肪を蓄えます。特にメスにとって、この時期に食物をどれだけ摂取できるかは、その後に控える出産、育児の成功に影響するため、とても大事なことなのです。

### 出産

冬眠中、メスは1月下旬から2月中旬の間に産みます。

生まれたての赤ちゃんは、ヒグマで400g前後、ツキノワグマで300g前後。

母グマは、秋に蓄えた脂肪を使って母乳を与えます。

冬眠穴から出てくる頃には、ヒグマの赤ちゃんは4~5kg、ツキノワグマの赤ちゃんは

3~4kgにもなります。

冬

食べ物のなくなる冬。

クマは樹洞、岩穴、土穴で冬眠します。

冬眠期間は5~6ヵ月ほど。

およそ12月から

翌年4月くらいまで続きます。

冬眠中、クマは水や食べ物を摂取せず排泄もしないと言われています。

## クマの一年と 生息環境の多様性

クマは、身体が大きく大食漢で美食家。  
クマが生きてゆくためには、季節の山の幸が、  
毎年そのどこかで必ず得られるような  
広くて多様な生息環境が必要です。  
そうしたクマの生命を支えることのできる環境は、  
他の様々な生物たちにとっても  
住みやすい環境といえます。





# クマ保全の課題

## 1. 生息地の減少・分断

かつて盛んに行われた道路建設、草地開発、単一の針葉樹種の広域的な植林などにより、クマの生息地は分断・縮小され、その生物多様性は減少し、住み心地が悪くなりました。

## 2. 人との軋轢

里地里山では、人間による利用が減少し、固有の生物相が衰退しています。同時にクマなど野生動物と人間の生活域の緩衝地帯としての機能も低下しています。また、里地では、食用に植えられたカキやクリ等の実が収穫されないまま放置されている上に、出荷できない果物などが生ゴミとして投棄され、クマを引きつけています。そのせいでクマが里地近くに出没しやすくなり、人とクマとの危険な出逢いや農作物被害が増加していることが疑われています。

## 3. 地球温暖化

地球温暖化により植物の分布や、結実の仕方が変化することが予想され、その結果クマの食料事情も変化する可能性があります。また、雪の降る量が少なくなると、クマが安心して冬ごもりできる地域が少なくなるなどクマの生存そのものも脅かされないか、また、クマと人とのトラブルが増えないか心配されます。

## 4. 絶滅の恐れ

絶滅の恐れのある地域  
個体群がいくつかあります。生息地の分断・縮小が進んだ上に、軋轢を回避するためにたくさんのクマが駆除されているためです。

大型の種子散布動物であるクマが絶滅してしまうと、地域の生物多様性に大きな影響が出る可能性があります。

③



# クマを保全するために

数十万年もの間、日本の自然の中に生活してきたクマの姿を、いつまでも残すための提言です。

## 1. クマとその生息地の保全

人間の影響でクマが現在の生息地から姿を消すことがないように、生息地の生物多様性や連続性を回復し、過剰な捕獲が行われないようにする必要があります。

## 2. 研究の推進

クマは日本の生物多様性の重要な要素の一つで、その維持にも貢献していると考えられます。しかし、その実態はよくわかっていません。科学的な研究の推進が必要です。また、そのような研究の成果にもとづいて、クマの性質や生活について正しい理解を進める必要があります。

## 3. 被害防止と軽減

人や人の財産がクマにより傷つけられ損なわれることの無いように、また、そういった被害防除のためクマの命が無用に奪われることのないように、被害の起こる状況を詳しく分析して、対策を行う必要があります。クマの保護について誰にも理解してもらうための第一歩です。

## 4. 連帯

クマの保全や被害防除のための長期的な展望と、地域に根差した取り組みが重要です。行政、研究者、市民は協力して、活動を進める必要があります。

## 5. 世界のクマの危機にも注目を

クマの絶滅の危機は世界のクマの生息するいたるところで起きています。ホッキョクグマは、地球温暖化の影響を直接受け、アジア、アメリカ大陸では、熊胆、熊掌目当てに密猟が行われています。また、アジアでは、生息地破壊の影響が大きいと考えられています。胆汁採取のために過酷な環境で飼育されているクマたちもいます。私たちは国外の状況にも目を向け支援を進める必要があります。

## 6. 地球にやさしい生活を

生物多様性の保全、地球温暖化の防止は身近な暮らしと密接に関わっています。対策に積極的に取り組む企業の商品を選択的に購入する、省エネに努めるなど、ひとりひとりがライフスタイルを考え直す必要があります。

# 日本クマネットワーク (JBN) とは

クマ類が生息できる環境は悪化しつつあると言われます。同時に、人とクマの軋があとを絶ちません。1996年に設立された日本クマネットワークは、クマの研究者、マスコミ、文筆業、行政関係者、学生、農・林家、一般のサラリーマン、主婦、自然保護団体などさまざまな方が参加し、情報を共有しながら、クマ類の適切な保護と軋の軽減のための様々な活動を行っています。

また、JBNでは、アジアのクマの保全を目指したネットワーク作りも行っています。アジアにおけるクマの生息状況や保全状況を知りたい方は、「アジアのクマたち - その現状と未来 (2007 日本クマネットワーク編)」をご覧ください。

[http://www.japanbear.sakura.ne.jp/cms/2008/12/post\\_25.html](http://www.japanbear.sakura.ne.jp/cms/2008/12/post_25.html)

問い合わせ先:

JBN 事務局 : [info@japanbear.org](mailto:info@japanbear.org)

HP: <http://www.japanbear.org/cms/>



④

発行: 日本クマネットワーク  
©2010 日本クマネットワーク

写真:

- ① © 横田 博
  - ② © 山中正実 (知床財団)
  - ③ © 山中正実 (知床財団)
  - ④ © 山崎晃司
- 編集: 中下留美子・高島千尋・大井徹  
デザイン・イラスト: 高島千尋  
印刷: いばらき印刷 (株)



問合せ先:  
日本クマネットワーク <http://www.japanbear.org/cms/>

本冊子は、平成 22 年度独立行政法人環境再生保全機構  
地球環境基金の助成を受けて作成しました。

